みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

カヌーと伝説：
中央カロリン諸島における伝統的航海術の一考察

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須藤, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5165

各個研究メモ

カヌーと伝説

―中央カロリン諸島における伝統的航海術の一考察―

須藤健一
第三研究部

ミクロネシアの中央カロリン諸島では、今日でも、帆走用アウトリッガー・カヌーによる島嶼間航海が、さかんになされている。そのなかでも、サタワル島が、もっとも伝統的な航海術を維持している島として注目されてきている（Alkire 1965:125―134, Gladwin 1970:37―38, Lewis 1972:279―280, 1977:1―3, McCoy 1976:131―137）。

そのことは、つぎに挙げる二つの事実からも明らかである。一つは、サタワル島の航海者が、この地域で二〇世紀にはいってから途絶えていた、サタワル島とサイパン島間八〇〇キロメートルにもおよぶ遠洋航海を、一九七〇年に復活させたことである。もう一つは、一九七六年に試みられた、ポリネシアの伝統的なダブル・カヌーによるハワイとタヒチ間の実験航海のキャプテンに、この島の航海者が選ばれたことである。

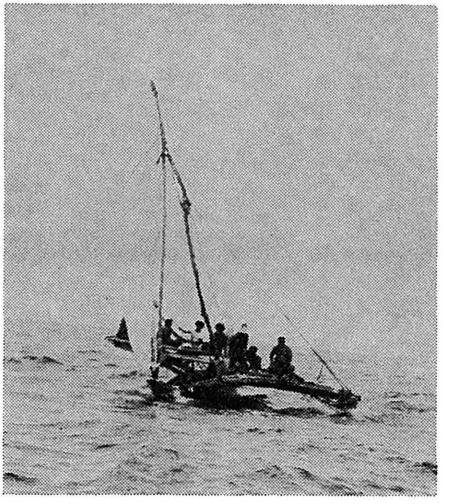
筆者は、石森秀三（本館第四研究部）とともに、昭和五三年六月から九月にかけて、サタワル島で伝統的航海術に関する予備調査をおこなった。サタワル島では、近年、外洋航海にコンパスやトランシーバーが使われるようになってきている。また、一九五〇年代に始められたキリスト教の布教にともなって、それまでおこなわれてきた航海術修得儀礼、航海の成功を予測する占い、および航海者に課せられる禁忌などが、ことごとく廃止ないしは放棄されてしまった。そして、それらに関する知識を体得している古老が、最近、あいついで亡くなっている。

そこで、われわれは今回の調査の主点を、とくに、二〇年前まで島の人びとが信じ、おこなってきた占いや諸儀礼、および伝統的航海術にまつわる神話や伝説などを記録にとどめる仕事においた。さいわいにも、島の酋長や長老たちが、この仕事に協力的で、われわれは、本来、部外者には秘密とされてきたそれらの内容に関しても、データを得ることができた。

本稿では、カヌーの部分名称についての由来を語る伝説を紹介し、伝統的航海術の一面を明らかにしてみたい。筆者は、今までに、この種の伝説を二編収集しているが、本稿であつかうのは、伝統的航海術を修得している長老の一人、ナ

モヌール氏（七二歳）より聞きとったものである。サタワル島では、ものごとの起源やそのいわれについて語り継がれてきた話は、〈フィヨン〉fiyong ないし〈ディッティナップ〉dittinnap と呼ばれている（以後、現地後の表記には、〈〉の記号を用いることにする）。

なお、伝説の収集は、はじめ、テープに収録し、それをサタワル語におこしたのちに英訳するという方法をとった。



アウトリッガー側から風を受けて帆走する外洋航海用カヌー

伝説のすじ

1．むかしむかし、パリューラップという名前の男が、トラックのウマン島に住んでいました。彼には、ロンゴラップ、ロンゴリック、アティヌマン、アティソウという名前の四人の息子がありました。

2．ある日、ロンゴリックは、魚をとる筌が欲しくなり、お父さんのパリューラップに作ってもらいました。彼はそれを持って海に行き、岩の側にしかけました。それから毎日、ロンゴリックが筌を見に行くと、そのなかはいつも魚で一杯になっていました。

それを見てうらやましくなった長男のロンゴラップは、お父さんのところへ行って、自分のために筌をもう一つ作ってくれるようにお願いしました。筌ができあがると、彼はさっそく海に出かけて、その筌を沈めました。しかし、いつ見に行っても、そのなかには魚が一匹もいませんでした。そこでロンゴラップは腹をたてて、お父さんに、

「どうしてロンゴリックの筌にはいつも魚がはいり、私のには一匹もかからないのか」

とあたりちらしました。

3．しばらくして、ロンゴリックは、またお父さんのところへ行って、今度は、

「私は自分のカヌーを持ちたくなりました。これからカヌーを作ろうと思いますが、よろしいですか」

とお願いして、お父さんから許しをもらいました。さっそく、彼は斧を持って森に出かけ、カヌーの用材にするパンの

木を探しまわりました。ちょうど良い木が見つかったので、彼は若いココヤシの実を二つとって、その木の根本に置き、パンの木の神様に捧げました。それから、斧を手に木の側に立って、

「コロイスの島にいるパリューラップさま、どうぞ私のこのパンの木を切らせてください。そして、私が、一、二、一、二、三、……と数えるぐらいに速く、私のカヌーが海の上を浮いて走ってくれますように、この木を枯らせて軽く、軽くしてください」

と唱えごとをあげました。

それをすませてから、彼は斧で木を刻んで倒し、幹の一方を切り落しにかかりました。この骨の折れる仕事をおえるころには、太陽はとっくに西の空に沈んでいました。つぎの日も朝早くから森に出かけ、幹のもう一方を切り落して木の内側を刳りぬく仕事を一生懸命でしました。その日のうちに、カヌーの底の部分の形がおおよそできあがりました。仕上げをするために、ロンゴリックは、それを東の海岸にあるカヌー小屋まで運びました。

4．それを聞いたロンゴラップもまた、お父さんのところへ行って、彼のカヌーを作る許しを得ました。彼は森に出かけて、カヌーをこしらえるのに適当なパンの木を見つけると、その木の神様にヤシの実をあげないで、すぐに切り倒してしまいました。夕方になったので、木の一方の端を切り落す仕事はつぎの日にすることにして、彼は家に帰りました。

彼の去ったあとで、倒れた木の神様が現われ、その木に向って、元のとおりに立ち上って前よりも大きくなるように話しかけました。神様は、

「コロイスの島にいるパリューラップさま、どうかこの横になっている私のパンの木を起こして、もっともっと大きくしてください」

と祈りました。

つぎの朝、森に来たロンゴラップは、自分が倒したはずのパンの木が立って、しかも前の日よりも大きくなっているのを見てびっくりしました。彼はあきらめずに、その日も木を切り倒す仕事から始めました。けれども、自分の倒した木が、つぎの朝には元どうりに立ってしまうという不思議なことが何日も続いたので、彼はお父さんのところへ行ってこのことを話しました。木を倒したときの様子をくわしく聞いたあとで、お父さんは、

「そんなことだったら、弟のロンゴリックに相談しなさい」

と言いつけました。

そこで、ロンゴラップは、弟のところへ行って、そのことを話し、二人で森に出かけました。ロンゴリックは、兄さん

がパンの木の神様に何もあげなかったことを知らされていたので、二つの若いヤシの実を兄さんにとってこさせました。そして、自分がしたときと同じように、それらを根元に置いて呪文を唱えました。

それから、二人は木を倒し、木の内側を削るところまで仕事を進めましたが、日が暮れたので家に帰りました。帰る途中で、ロンゴラップは弟に、

「もし、あしたの朝にあの木が立ってでもいたら、承知しないぞ」

とすごみました。

つぎの日の朝、二人が森に行って見ると、その木は倒れたままでした。彼らは、その日のうちに木の内側を刳りおえ、その木をカヌー小屋に引っぱって行きました。

5．ロンゴラップとロンゴリックは、カヌー小屋で、お父さんからカヌーの作り方を習っていました。ロンゴラップは、お父さんのこれまでのやり方に不満を抱いていたので、

「お父さん、あなたはどんな物でも作ることができますし、あらゆることを知っています。そのようなお父さんを尊敬しています。私たちは、それらを一つづつおぼえてゆきたいと思っています。けれども、えこひいきがすぎます。お父さんの知っていることを平等に教えてください」

と言いました。

けれども、パリューラップは、ロンゴラップの目に怠け者の相があることを見ぬいておりました。だから、息子たちに同じようにしてやっても、弟の筌には魚がたくさんはいるし、倒した木が起き上るようなこともないのに、兄の筌には一匹の魚もかからないし、木の神様に憎まれたりするのだと、とりあいませんでした。

6．ところが、ロンゴラップは、それらのことに対する腹いせで、もう一人の弟、アティヌマンを殺すたくらみを企てました。ある日、ロンゴラップは、カヌー作りの仕事中に飲むヤシの実をとりに行くとお父さんに言って、一人で森に出かけました。（お父さんは、彼がアティヌマンを殺しに行くことをすでに知っている。）

アティヌマンは、カヌー小屋のある海岸とは反対側の、島の東海岸に住んでいて、毎朝、雲や太陽の上がる水平線の様子から、その日の天気を予測してお父さんに知らせる役目にあたっていました。

ロンゴラップは、森のなかの道をとおって弟のいるところに行きました。彼は、まず自分が弟を殺すのを誰にも見られないようにするため、東海岸に通ずるすべての道を塞ぎました。その細工をすませると、彼は一本の太い棒を持って弟に近づき、殴りかかろうとしました。しかし、彼の頭のなかに自分の弟を殺すことの恐ろしさがちらつき、いったんは思い

直して、来た道を引き返しました。けれども、お父さんの〝えこひいき〟を思うと我慢できなくなって、海岸ぞいの道から弟のところに近づき、弟の眉間を打ち砕いてしまいました。

ロンゴラップは、横たわっているアティヌマンの死体をヤシの葉で包み、その首にロープをきつく結びつけました。あたりに誰もいないのを確かめて、彼は立ち上り、その死体を波打ちぎわまで引きずって行きました。それから、石ころを探し出して重しにし、弟を海の底に沈めてしまいました。弟の死体が二度と浮かび上らないのを見とどけてから、彼は、森でとったヤシの実を肩に、何くわぬ顔をしてカヌー小屋に戻ってきました。お父さんは、彼のしでかしたことをよく知っておりましたが、そのときは何も言いませんでした。

8．お父さんとロンゴリックが続けていたカヌー作りを、ロンゴラップが手伝おうとしたときには、船体はすでに完成し、アウトリッガー（腕木）も船体に取りつけられてありました。そこで彼は、このつぎにどの部分を最初につけたらよいかをお父さんにたずねました。お父さんは、二又になった四本の短かい木を取りあげました。それらの木が、カヌーのバランスを保つために据えつけられた二本の腕木の先端に置かれて、腕木と浮木（後述）をつなぐ連結材であることを説明しました。そして、

「これらは〈ヤームゥ〉と呼ばれる。なぜなら、おまえは弟を殺して海に引きずって行く前に、あたりに誰もいないか、きょろきょろ見まわしたからだ」

とお父さんは、連結材の名前のいわれをロンゴラップに話して聞かせました。（以後、カヌーの部分名称に適用されているサタワル語の日本語訳には、……の記号をつけて表記することにする。）

9．ロンゴラップは、〈ヤームゥ〉のつぎに何がくるかを聞きました。お父さんは、数本の強い棒を手に持って、それらが〈ヤームゥ〉と腕木が動いて外れないようにするための補強材であることを教えました。それから、

「これらは〈ワイレー〉と呼ばれる。なぜなら、おまえは弟の死体を海岸ぞいの道から波打ちぎわまで引きずって行ったからだ」

と言いました。

このような問答の形式で、パリューラップは、カヌーの建造の順序にしたがって、部分名称の由来をロンゴラップの犯した弟殺しと関連づけて述べてゆく。

10．パリューラップは、一本の太い木を指して、それが〈ヤームゥ〉の下に置かれて、張り出した腕木に結びつけられる浮木であることを説明したあとで、

〔部分名称〕

①〈ヤームゥ〉　⑦〈サーニソォプゥ〉　⑬〈ユウ〉
②〈ワイレー〉　⑧〈アナップ〉　⑭〈メレメル〉
③〈タ－ム〉　⑨〈イラムワーン〉　⑮〈エベープ〉
④〈ソーソ〉　⑩〈イラロープゥト〉　⑯〈ワーニエン〉
⑤〈ワイソー〉　⑪〈スワ〉
⑥〈アーウ〉　⑫〈ムエーン〉

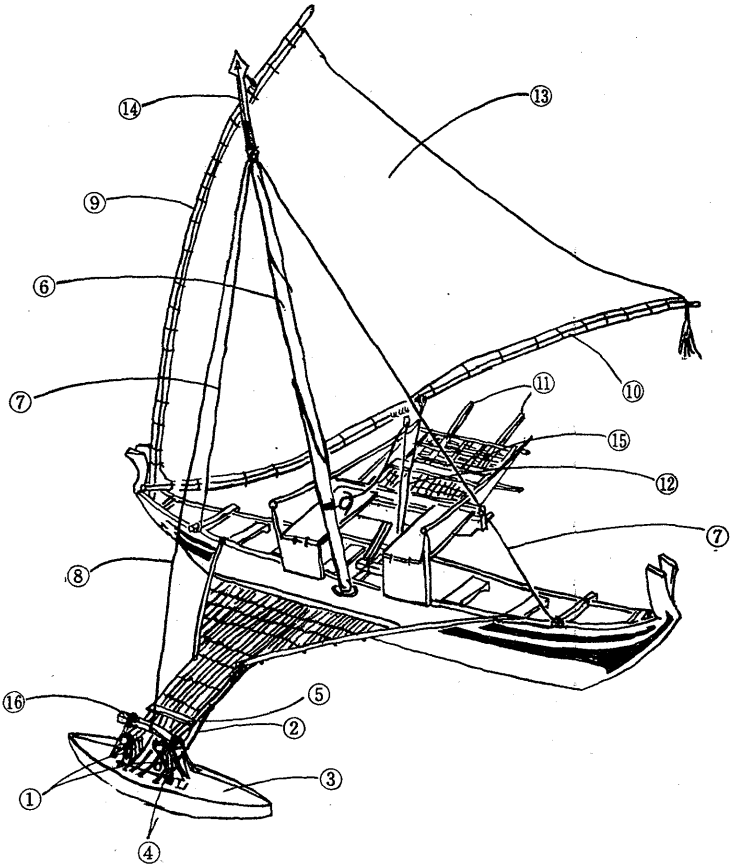


図１．帆走カヌー〈ワ・セラック〉の部分名称

「これは〈ターム〉という名前だ。なぜなら、おまえは太い棒を振り上げて弟を殺したからだ」

と言いました。つぎに、彼はココヤシの繊維でなわれたロープを手にして、それが浮木と腕木とを結う縄であることを教えて、

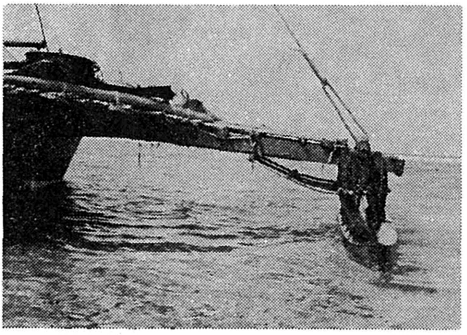
「これは〈ソーソ〉と呼ばれる。なぜなら、お前は弟の死体に石ころをのせて海に沈めたからだ」

と言いました。さらに、彼は一枚の厚板をつかんで、それが二本の腕木の先端の上側に結びつけられて、腕木を安定させる役目をすることを話して聞かせました。そして、

「これが〈ワイソー〉だ、なぜなら、おまえは弟を海に沈めるのに、〈ソーソ〉のほかに何も持っていなかったからだ」

とつづけました。

ここまでで、アウトリッガー側の部分名称に関する説明が終り、話はマストの部分へと移ってゆく。



アウトリッガーの部分

11. パリューラップは、マストにする柱にさわりながら、

「これは〈アーウ〉という名前だ。なぜなら、おまえは弟を殺したあとで、その死体を波打ちぎわまで運ぶために立ち上ったからだ」

と言いました。つぎに、マストから船首と船尾の横木に張られる二本のロープを指して、

「このロープは〈サーニソォプゥ〉と呼ばれる。なぜなら、おまえは東の海岸に弟のほかに誰もいないのを確かめて、殺しの企てをつづけたからだ」

と話をつづけました。さらに、彼は、マストからアウトリッガー側に結ばれるロープをおさえて、それが帆を上げたときにマストの横倒れを防ぐための縄であることを教えました。そして、

「これが〈アナップ〉だ。なぜなら、おまえは弟を殺せないで引き返したときに、憎しみのあまり血迷ってしまったからだ」

とつけ加えました。

12. それから、パリューラップは二本の長い柱をロンゴラップに手渡しました。そして、帆が張られるとき、そのうちの一本は立たせておかなければならないし、ほかの一本は横

にしておかなければならないことを話して、二本の柱のとりつけかたを説明しました。そのあとで、

「立つ方の柱は〈イラムワーン〉と呼ばれる。なぜなら、おまえも知っているように、この島には、女どもは男が坐っている近くを立って歩いてはならないというしきたりがある。同じように、弟も兄さんの坐っているそばで立つことができない。だからこの柱はおまえ（男）だ。そして、横になる柱は、〈イラロープゥト〉と呼ばれる。この方はおまえが殺した弟だ。なぜなら、弟はおまえより年下だから、弟を女に、おまえを男にたとえてあるのだ」

と言いました。

13・つぎに、パリューラップは、アウトリッガーの反対側につけられるプラットホームの支柱を二本、ロンゴラップに与えました。

「これらは〈スワ〉と呼ばれる。なぜなら、おまえは弟の眉間を打ちつぶして殺したからだ」

と説明しました。

14・パリューラップは、帆を操作するためのロープをとり出して、

「これが〈ムエーン〉だ、なぜなら、おまえは、海に沈めた弟の死体が二度と海面に浮上しないように、石ころにきつく縛りつけたからだ」

と教えました。

15・パリューラップは、今度はタコの木の葉で編まれたマットをとり出して、

「これがおまえの帆だ。〈ユウ〉と呼ばれる。なぜなら、おまえが弟の上にのせた石ころは、積み上げて土地と土地の境界を示すのに使われるからだ」

と言いました。

16・パリューラップは、マストの上部につけたす木を指して、

「これが〈メレメル〉だ。おまえは弟を棒の先で殺したからだ」

と説明しました。

いままでの話のなかですでに、アウトリッガーの反対側の一部〈スワ〉についてふれられていたが、つぎに、その部分全体を指す名称の説明がある。

17・パリューラップは、アウトリッガーの反対側に張り出すプラットホームを、〈スワ〉の上にこしらえて、船体中央部にはめこみました。そして、

「これが〈エベープ〉という名前だ。なぜなら、おまえは弟を殺したことを私たちに、ずって隠していたからだ」

とロンゴラップに話して聞かせました。

18．最後に、ロンゴラップは、マストから下っている〈アナップ〉の端をどこに繋いだらよいのかをたずねました。すると、お父さんは、削ってある一本の棒をとり上げて、その真中に穴をあけました。それを二本の腕木の先端、ちょうど浮木と同じ位置に置いて、その両端をヤシ縄で浮木に縛りつけました。それから、彼は、〈アナップ〉をその木の穴にとおして、結びながら、

「穴のあいたこの棒は、〈ワーニエン〉と呼ばれる。なぜなら、おまえは殺した弟を海へ運び出すのに、一本のロープをとり出して引きずる方法をとったからだ」

とそのいわれを説明しました。

以上が、カヌーの部分名称の由来についてナモヌールの話した内容である。話のすじは、弟殺しの〝完全犯罪〟を企んだ兄に、父がその証拠をカヌーの部分名称にあてはめながら、兄の手口をあばいてゆくというものである。

つぎに、主人公の性格、〈ワ・セラック〉と呼ばれる帆走カヌーの構造など、この伝説の内容に関する若干のコメントを加えることにしよう。同時に、同種のモチーフを語っているほかの伝説との比較をとおして、この伝説の特徴を検討してみることにする。なお、その順序は、伝説のすじの展開に従がう。

若干の解説と検討

1．まず、この伝説に登場する〝人物〟の名前の語意とその性格から始めよう。

父親のパリューラップ（Palúlap）は、〈パリュー〉が「航海者」、〈ラップ〉が「大きい」という語意であるから、直訳すれば、「大航海者」ということになる。しかし、伝説のなかでは、父親であると同時に神様（34）として現われている。島の人びとの説明によると、パリューラップは、〈ヤニューアラマス〉（神様であり、人間である存在）で、〝知識の源〟と性格づけられている。また、航海に関しては、カヌーの建造、天気の予測、占いなど、あらゆることをとりしきる最高神とみなされている。

息子のロンゴラップ（Rongolap）、ロンゴリック（Rongorik）は、〈ロンゴ〉が「聞く」、〈リック〉が「小さい」という語意であるから、直訳すれば、それぞれ「大きいことを聞く」、「小さいことを聞く」ということになる。この伝説の話者の説明によると、前者は、「父親の言うことにあまり耳をかさない息子」で、後者は、「父親の言うことはどんなことでもまかいて聞きもらさない息子」という意味あいになる。もう一編の伝説の話者は、「父親の面倒をあまりみない息子」、「父親の世話をよくする息子」というふうにそれぞれを説明している。

また、昭和六年から七年間サタワル島に滞在し、一五五話におよぶ民話を収集した土方久功によると、ロンゴラップ、ロンゴリックの〈ロン〉rong は、呪いの呪文の意味であるから、それぞれ、「大きな呪い」、「ふつうの呪い」という解釈が適当であると述べている（土方一九七五：一六一）。同じ中央カロリン諸島のプルワット島で、パリューラップについての伝説を収録したエルバートは、ロンゴラップを「不従順」、ロンゴリックを「従順」の意味に訳している（Elbert 1971:9, 19）。

いずれにせよ、ロンゴラップ、ロンゴリックの二兄弟は、航海をモチーフにした多くの伝説のなかで、主人公として登場し、前者がいつも失敗する者、後者が失敗した兄を助ける者というすじで話を展開させている。

四番目の息子であるアティソウは、島の西海岸に住み、日没の空の様子や星の輝きをみて、翌日の天気を予測し、父親に知らせる役である。

2．この話では、筌に魚がはいる、はいらないことの原因にふれてないが、筌の製作方法は個人の秘密とされている。筌の良し悪しは、魚の進入路となる筌の入口の形と大きさによって決まるといわれる。筌はほかの島からサタワル島にもたらされたもので、島の人びとはその経路を具体的にあとづけることができる。たとえば、流木に群がる魚をとる筌は、ポナペ島の東方にあるクサイエ（コスラエ）島から、オレアイ、イファルク、ラモトレクの各島を経てサタワル島に伝えられたといわれる。

3．キリスト教に改宗する以前のサタワル島における伝統的な信仰体系は、あらゆるものに〈ヤニュー〉が宿っているという考え方に基づいていた。この〈ヤニュー〉yaanú は、超自然的な霊的存在で、神霊、死霊、動物霊、植物霊、妖怪など様々な形態をとって出現すると考えられている。そして、これらは、人間に良いことをもたらしてくれる善神〈ヤニュー・エガッチ〉と危害を加える悪神〈ヤニュー・エンガウ〉の二種に大別されている。とくに、夜になると森は、悪神が出没する世界とされ、人間が足を踏みいれてはならないところと考えられている（土方一九四〇：三〇―三一）。

サタワル島では、それらの神ないし精霊に捧げる供物としてココヤンの実が不可欠で、その数も二個、四個というように偶数が良いとされる。（この数の数え方やその意味、占いに表われる数の観念などに関しては、石森が近く報告する予定であるので参照されたい。）

また、呪文で語られている神様の住むコロイスの島は、人間の力のおよばない、呪術的な秘密の力をもった神のいる想像上の世界と考えられている。

6．ロンゴラップの殺す相手は、この伝説では、アティヌ

マンになっているが、筆者の収集したもう一編の伝説と土方の民話のなかでは、ロンゴリックになっている（土方　一九七五：一四三―一五八、一六一―一六五）。しかし、土方の話には、カヌーの部分名称の由来を説明する場面がすべて欠如している。

ここで、筆者が収集したもう一編の伝説を簡単に紹介してみよう。これは、島で〈センナップ〉（カヌー作りの名人）と認められている、ルマイ氏（五三歳）から得たものである。

むかし、セミニッカロール、メサイタウス、とパリューラップという名前の三人の男がいました。前二者は、カヌーの作り方を、後者は、航海のしかたを修得していました。ある日、セミニッカロールと、パリューラップは、それぞれがもっている知識を知りたくなって、お互いに交換し合いました。それでパリューラップもカヌー作りの方法を身につけるようになりました。

それから、彼は一人の女性を見つけて結婚しました。最初に生まれた息子にロンゴラップ、つぎに生まれた息子にロンゴリックと、それぞれ名前をつけました。二人の息子が大きくなったので、パリューラップは、航海のしかたとカヌーの作り方を二人に教えました。彼は、ロンゴラップがあまり自分の面倒をみてくれないので、それらについて概説的なことしか教えませんでした。それにくらべ、ロンゴリックはよく世話をしてくれるので、彼の知っているすべてのことを細部にわたって教えました。

ロンゴラップはカヌーを作る木を倒しに行き、そのパンの木が倒れたので置いて帰ってきました。そして翌日行って見ると、その木はまた立って、幹がたいへん大きくなっていました。それを切り倒すために、ロンゴリックを呼んで、二人で出かけました。木が倒れてしまうと、二人はその木を削ってカヌーを作り始めました。その仕事をおえたので、今度は、ロンゴラップはロンゴリックを誘って腕木にする木を探しに行きました。腕木をとる〈ファリヤップ〉の木にロンゴリックを登らせて、ロンゴラップはその木を切り倒しました。木が倒れたので、ロンゴリックはその下じきになり、頭をつぶして死んでしまいました。

ロンゴラップは弟の首に紐をつけて海まで運び、石をのせて海底に沈めてしまいました。それから彼はカヌー小屋に戻ってきました。お父さんは

「弟のロンゴリックはどうした」

と聞きました。ロンゴラップは、

「弟はすぐ帰ってくるよ」

と答えました、お父さんは、ロンゴラップが弟を殺してしまったことを知っていました。そこで、彼は草と木の根から薬

を作ってロンゴリックが沈められている海へ行き、その薬を与えて生き返えらせました。

話はそれから、パリューラップが、ロンゴラップに、カヌーを作る順序とカヌーの部分名称を教えるというすじで展開されてゆく。この話でも、カヌーの部分名称についての由来は、前の話と同様、ロンゴラップがロンゴリックを殺して海に沈めるという一連の情景に基づいて説明されている。

この二編の伝説において、登場人物や殺される人物などについては異なった場面と筋書が設定されている。しかし、カヌーの部分名称の由来に関しては同じ内容で話が展開されている。この点について、前の伝説の話者、ナモヌールは、伝説を誰から伝授されたかによって、その話のすじが異なってくると説明している。筆者は、この種の伝説を二編しか収集していないので、そのバリエーションについては多くを語れない。しかし、航海術や占いなどのサタワル島への伝播にまつわる伝説などの内容も考慮に入れると、伝説の構成上の相違は、単に話者の恣意性によるものとは考えられない。これらの背景には、造船技術が伝えられた時代と経路の違いが示唆されているように思われる。筆者は、たとえばカヌーの部分名称の由来を語るような、同じモチーフの伝説を比較することによって、この地域における諸技術の伝播のあとを解明する糸口が得られるものと予測している。

〔部分名称〕
①〈ヤームゥ〉
②〈ワイレー〉
③〈タ ーム〉
④〈ソーソ〉
⑤〈ワイソー〉
⑪〈スワ〉
⑮〈エベープ〉
⑯〈ワーニエン〉

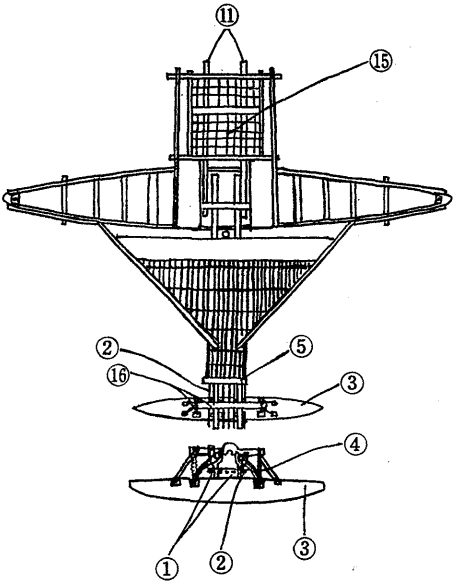


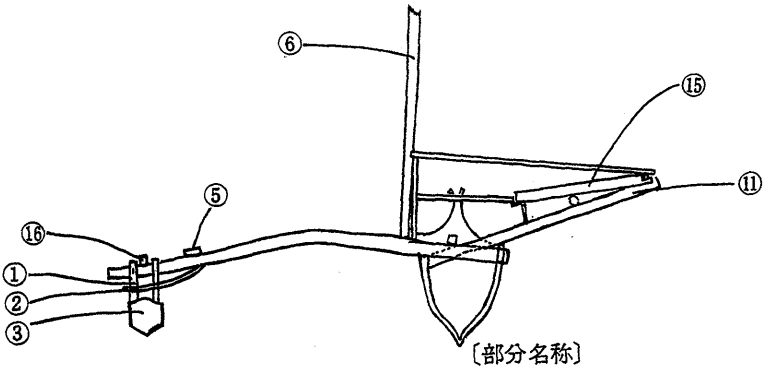
図2. ＜ワ・セラック＞の見取図、上 平面、下 側面
(Doran 1976：33より修正)

7．サタワル島の伝統的な神観念には、水葬した死体が海底から浮上する現象は、死者の霊魂が〝悪神〟となって生者に危害を加えるとして恐れられ、忌避されるという考え方がある（土方　一九七四：一二九―一三八）。

8．話のなかでも、父親が息子にカヌーの各部分のしくみと機能についておおまかに語っているが、ここで、外洋航海用カヌー、〈ワ・セラック〉waserák の構造を簡単に説明しておく。現在サタワル島で使われている〈ワ〉（カヌー）は、四種類に類別されているが、〈ワ・セラック〉（帆走カヌー）は、そのなかでもっとも大型で、船体の全長が八～九メートルにおよぶ。本館のオセアニア展示に陳列されている「チェチェメニ」は、この型に属し、中央カロリン諸島に分布し、ポポー（popo：巾の広い）型と分類されている（Haddon and Hornell 1975: 374―383）。なお、サタワル島におけるカヌーの種類については、別のところで詳細に報告する予定であるので参照されたい。

〈ワ・セラック〉は、構造上、船体、アウトリッガー、その反対側のプラットホーム、マスト・帆の四部分より構成されている。

船体は、一本の丸太を刳り抜いた船底部の材に、船首、船尾と数枚の舷側板を繋ぎ合わせて船殻とし、その上部に八本の横木をわたした構造になっている。船殻の形は、断面図か



〔部分名称〕
①〈ヤームゥ〉　⑥〈アーウ〉
②〈ワイレー〉　⑪〈スワ〉
③〈ターム〉　⑮〈エベープ〉
⑤〈ワイソー〉　⑯〈ワーニエン〉

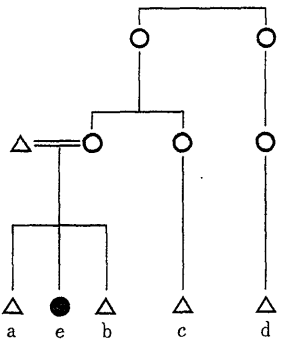
図3．〈ワ・セラック〉中央部の断面の見取図

らわかるように、アウトリッガー側の竜骨の高さが、その反対側よりも高くなっている（図3参照）。これはアウトリッガーとの関係で、船体の両側にかかる水の抵抗力を同じくし、カヌーをまっすぐに進めるための工夫である。また、船首と船尾は同じ形で、それらの先端部がV字の形をしている。これは、カヌーの進路を決めるさいに、その指針となる目標物（たとえば星）を、船首、船尾のV字の真中にセットするためである。船底部、船首、船尾と舷側板は、ココヤシの内皮とパンの木の樹液を接合材とし、ココヤシ繊維製の紐で繋ぎ合わされる。繋ぎ目からの水の浸入を防ぐためには、サンゴを砕いた〝セメント〟が用いられる。

アウトリッガーは、船体中央部の舷縁から張り出した二本の横木とその先端部分に連結された浮材よりなる。この横木と浮材の用語として、筆者は腕木と浮木をそれぞれに適用してきた。それで、アウトリッガーが、カヌーに浮力をつける機能をはたしているような印象を与えたかも知れない。しかし、その機能は、伝説のなかでもふれられていたようにカヌーのバランスを保つことにある。この型のカヌーは、風をアウトリッガーの方向から帆に受けて進むために、その反対（風下）側に力がかかるしくみになっている。そのため、アウトリッガーは、カヌーの重心を風上側に置こうとする〝重し〟の役目をはたしている。

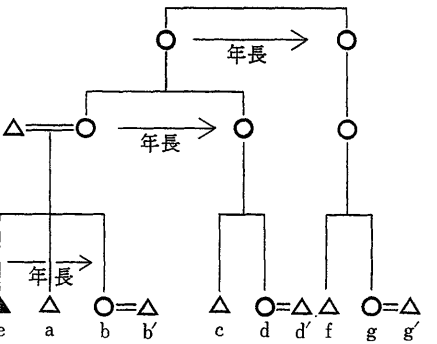
そのことは、帆の操作をみれば明瞭になる。カヌーの航行中、帆は、浮木の底面を海面に接する状態に保ち、できるだけ浮木の受ける水抵抗を少くするように操作されなければならない。また、浮木が浮力をつける目的で取りつけられるものであれば、その大きさは大きいほど良いということになる。しかし、腕木と浮木の寸法は、船体の長さとの関連で一定の基準が考えられている。腕木の長さは、カヌーの船首から船尾までの長さの二分の一に船尾から親指と人差指を広げた長さを加えたもの、浮木の長さは、船底部の竜骨の長さの二分の一と決められている。浮木が大きすぎると、カヌーの速力は鈍り、逆に小さすぎると、カヌーは転覆の危険性をつねにはらむということになる。このように、アウトリッガーは、カヌーの構造上、安定装置としての機能をはたしているのである。

カヌーの風下側に取りつけられるプラットホームの大きさは、大人が横になれる程度というように計られ、腕木や浮木の寸法におけるほど明確な基準がない。このプラットホームは、二本の支柱を船体中央部にある二本の腕木の外側に装着させるだけで、自由に取り外せる構造になっている。これは、形態上、アウトリッガーの反対側に船体から張り出していることから、その機能がカヌーのバランスをとることにあるようにみられる。しかし、狭いカヌーの空間において、そ



（eが、a,b,c,dに対しておこなう）

図4．〈アッポレ〉の親族関係



（eが、a,b′,c,d′,f,g′に対しておこなう）

図5．〈アッポレ〉の系譜関係

の場所は、屋根をつけて貴重品や衣類を置いたり、乗組員が休憩するところ、すなわち船倉と船室の役割をはたす。

マストと帆桁の構造にも、この型のカヌーの特徴がある。風の方向によって帆桁を船首と船尾に移動させることが可能で、それにともなってマストも前後に傾斜させることができるしくみになっている。そのために、向い風の場合でも同じ形をした船首と船尾とをいれかえることによって、〈エンメイ〉と呼ばれるジグザグ航法をとりながら、カヌーを目指す方向に進めることが可能となる。マストと二本の帆桁の長さも船体の大きさとの関連で一定の寸法が決められている。マストの長さは船体の全長から、船尾から最初の横木までの長さを引いた長さである。

12．〈イラムワーン〉irámwan〈イラロープゥト〉iraroo-pwut は、直訳すればそれぞれ、「男の柱」、「女の柱」と意味である。サタワル社会には、女性が自分と同じ〈アイナン〉yáinang（母系リネッジ）に属する異性のキョウダイのいるところでは、彼らより高い姿勢をとることを禁じる習慣がある。これは〈アッポル〉yáppor と呼ばれ、男性にも一部適用される。男性にとっては、自分より年長で同性のキョウダイ、年長で異性のキョウダイの夫、自分の母より年長で母と同性の母のキョウダイの子およびその夫に対してこの規制が適用される（図4、5参照）。なお、サタワル語の親族名称

体系は、世代と性を区別するが、系（line）を区別しない、いわゆる「ハワイ型」である。

まとめ—来年度の調査に向けて

今回の調査では、この伝説の内容、とくにサタワル語の文法体系に関しては十分に理解するにいたっていない。本稿で用いたサタワル語の表記法は、サタワル語と同じトラック語系に属す、オレアイ語、プルワット語の英語辞書を参考にした（Bender 1971, Sohn and Tawerilmang 1976, Elbert 1972）。それにもかかわらず、本稿をあえて書いた動機は、中央カロリ諸島でカヌーの部分名称の由来に関する報告を、筆者はそれまで得ていなかったからである。

ここでは、来年度に予定されている本調査を念頭におき、カヌーについての二、三の問題を提出することにする。

本稿であつかった伝説で語られている時間的背景は、「むかしむかし」で始められているように、「不特定の過去」の時点であるが、その地理的背景に関しては、「トラック諸島ウマン島」とサタワル島の東方に位置する「実在の場所」が設定されている。そして、伝説のモチーフは、現在使用されているカヌーの部分名称の由来を語ることにある。また、この伝説のすじは、父から息子へとカヌーの建造技術を伝授する形をとりながら、教訓的な意味内容をもって展開されている。

伝説のなかで実在する場所が設定されるのは、この伝説に限ったことではなく、現在までに収集している五編の航海をモチーフにした伝説においても、多くみられることである。この種の伝説をより多く収録することが、まず基礎的な仕事であるが、それらの内容を比較、検討することによって、筆者は、中央カロリン諸島における航海術の伝播経路を解明する一つの手懸りが得られるものと考えている。

この伝説で語られているカヌーの部分名称は、わずか一六にすぎない。今回の調査で、それらを含め一六〇におよぶカヌーの部分や空間を表わす名称を得ている。そのなかでも、一六の名称は、船体を除くカヌーの構造において、いずれも、骨格をなす部分を指示している。それらが派生したもとのことばは、たとえば、〈ヤームゥ〉yaamw が、あたりを見回すという動詞 yaunamtiw, yaunamta であり、〈ワイレー〉wayrée が海岸ぞいの道を指す名詞 rére である。一六の名称のうち、動詞から派生しているものが九、名詞からのものが七となっている。これらの原語がどのような原理に基づいて変形され、カヌーの部分名称に転用されるにいたったかについては、よりくわしく調査する必要がある。一六の名称以外に、人体名称、たとえば頭、顔、目、鼻、足などもカヌーの部分を表わす名称として用いられている。これらのこと

ばが、カヌーの部分名称に適用された象徴的な意味と同時に、カヌーという物体を約一六〇の部分に類別する認識の背景を探ることも興味あるテーマの一つである。

この伝説のなかでも、カヌー建造のプロセスが大まかに語られているが、実際のカヌーの建造は、いくつかの段階を経て進められる。まず、森で木を切り倒して船底部の荒削りをする作業から始まり、カヌー小屋への船底部の運搬、カヌー小屋での船体の仕上げ、アウトリッガー部分の据えつけ、風下側のプラットホームの製作、マスト、帆桁、帆の組み立て、そして進水という段取りで仕事が進められる。カヌー作りは、〈センナップ〉sennap と呼ばれる、造船技術を修得した船大工の指揮のもとに、依頼者の母系リネッジやムラの成員の助力によってなされる。このカヌー作りをめぐる人間関係や依頼者から船大工への物品の贈与慣行などの把握、分析も、サタワルの社会構造を理解するうえで重要な事例となる。



手斧による船底部の仕上げ

また、それらの諸段階には、多くのタブーがともない、同時に、カヌーが思いどうりに完成し、速く走るようにとの願いをこめた儀礼がとりおこなわれる。伝説のなかでも、パンの木を切る前に、その木の神様にココヤシの実を捧げ、呪文を唱える場面があった。この伐採前におこなわれる儀礼は、カヌーの基本をなす船底部の丸木に、ひび割れが起こらないようにとの意味をもつもので、以後のカヌー建造の作業過程を左右する点において重要である。このほかに、航海の神などのいわゆる呪術・宗教的な存在との関わりをもつ儀礼は、カヌー小屋での仕事始め、船体の完成時と進水の各段階でなされる。

しかし、一九五〇年代のキリスト教の伝来とともに、カヌーの建造技術の面では、従来の伝統的方法が保持されてきているが、儀礼的側面では、呪文をはじめ供物にいたるまでことごとく廃止されてしまった。そこで、古老の生きているあいだにカヌー作りに不可欠な要点であったそれらの儀礼の内容を、復元という手段をとってでも、詳細に記録にとどめておくことが急務であると思われる。

いずれにせよ、中央カロリン諸島における伝統的航海術の把握には、たとえばカヌー作り一つをとり上げてみても、そ

の建造技術をはじめ、タブーや儀礼などの呪術・宗教的側面、共同労働や贈与慣行などの社会・経済的側面、さらに、神話や伝説などの口頭伝承の側面など、多面的な視点からのアプローチが必要になってくる。

中央カロリン諸島でなされている伝統的な島嶼間航海は〝推測航法〟である。この航法は、目指す島の方角決定、船の位置確定、目的地への船の進航という三つの側面からなりたつ。これは、具体的には、波、風、雲、太陽、月、そして星などの自然現象に対する認識、鳥や魚の習性と海水、漂流物および岩礁の特性についての知識、〈エタック〉による船の位置確認、〈エンメイ〉などの操船技術などに基づいておこなわれる。本調査では、遠洋航海への同行調査によって、その航法による航海術の実態を参与観察することに中心テーマをおいているが、同時に、陸上で前述の諸側面からの情報収集を続行することも、伝統的航海術を総合的に把握するうえで重要な仕事となってくる。

文献

Alkire, W. H. 1965 *Lamotrek Atoll and Intra-Island Socioeconomic Ties*, Illinois Studies in Anthropology No. 5. The University of Illinois Press.

1970 "Systems of Measurement on Woleai Atoll, Caroline Islands" *Anthropos* 65:1—73.

Bender, B. W. 1971 "Micronesian Languages" in T. A. Sebeok (ed.) *Current Trends in Linguistics*, VIII. The Hugue: Mouton, pp. 426—465.

Damm, H. und E. Sarfert. 1935 "Inseln um Truk, 2 Halbband: Polowat, Hok, und Satawal" in G. Thilenius (ed.) *Ergebniss der Südsee-Expedition* 1908—1910, II, B, 6, 2.

Doran, E. Jr. 1976 "Wa, Vinta, and Trimaran" in B. R. Finney (ed.) *Pacific Navigation and Voyaging*. The Polynesian Society Incorporated. pp. 29—45.

Elbert, S. H. 1971 *Three Legends of Pulwat and a bit of Talk*. Pacific Linguistics, Series D, No. 7. The Australian National University.

1972 *Pulwat Dictionary*, The Australian National University.

1974 *Pulwat Grammer*. Pacific Linguistics, Series B, No. 29. The Austrarian National University.

Gladwin, T. 1970 *East is a Big Bird—Navigation and Logic on Pulwat Atoll*, Harverd University Press.

Goodenough, W. H. 1953 *Native Astronomy in the Central Carolines*, Museum Monographs: The University Museum, University of Pennsylvania.

Haddon, A. C. ans J. Hornell 1975 *Canoes of Oceania*. B. P. Bishop Museum Press.

土方久功 1940 『ヤップ離島ナテワヌ島の神と神事』南洋群島文化協会

1974 『流木―ミクロネシアの孤島にて―』未来社
1975 『愛欲キテロス島民話―ミクロネシアの孤島―』アルドオ
Lessa, W. A. 1961 *Tales from Ulithi Atoll—A Comparative Study in Oceanic Folklore*, Folklore Studise: 13, University of California Press.
Lewis, D. 1972 *We, the Navigator*, The University Press of Hawaii.
1977 "Mau Piailug's Navigation of Hokulea from Hawaii to Tahiti" *Topics in Culture Learning*, Vol. 5: 1—23.
McCoy, M. 1976 "A Renaissance in Carolinian-Marianas Voyaging" in B. R. Finney (ed.) *Pacific Navigation and Voyaging*, The Polynesian Society Incorporated, pp: 129—143.
Sohn, H. and A. F. Tawerilmang 1976 *Woleaian-English Dictionary* PALI Language Texts: Micronesia, The University Press of Hawaii.